47

フーフェランドの「医戒」から引用した校是「克己殉公」を実践した小此木信六郎

岩﨑　一，殿﨑　正明，志村　俊郎，唐澤　信安
日本医科大学医史学教育研究会

（1）はじめに

C.W.フーフェランド（扶歇蘭土）（1762～1836）はドイツ第一の名医としてヨーロッパで名声を謳われていたが，その蘭訳本（Enchridion Medicum）が日本に齎（モタラ）されるや幕末の蘭方医達に大きな感銘を与えた．杉田成卿による部分訳「医戒」は貧者に向ける限りない人間愛と，あるべき医の倫理を示したものとして日本での受容は圧倒的だった．日本医科大学第二代学長小此木（オコノギ）信六郎は苦難続きの大学の危機を救うべく老躯をひっさげて就任したが在職中に他界した．終生フーフェランドを敬愛し「医戒」を実践した一人である．

（2）日本医科大学着任迄の小此木の略歴

小此木信六郎は万延元年（1860）3月6日，現在の福島県二本松市で城主丹羽氏の御典医を勤めていた小此木間雅（カンガ）（玄智）の六男として出生，明治6年福島第一小学校別科に入学，次いで須賀川病院医学所に学び同9年上京し同13年大学豫科を経て東京帝国大学医科大学に学んだが中退し同21年渡独，チュービンゲン大学に学び同24年同校卒業ドクトルメジチーネの学位を取得，同大学耳科学部長ドクトル，ワーゲンホイゼルの下で耳鼻咽喉科学を研鑽，同29年帰国，同年8月，神田駿河台に小此木耳科医院を開業．済生学舎舎長長谷川　泰は小此木に直（タダ）ちに済生学舎の耳鼻咽喉科講師を依頼している．長谷川の信頼は終生大変厚かった．

（3）日本医科大学における小此木の活動

大正5年5月学校の昇格問題にからんで学生の殆どが退学してしまった学校騒動の為，日本医学専門学校は極度の経営困難に陥った．大正7年4月山根正次校長は小此木に後継者の一員として理事長の職を委託して去った．小此木は他の理事達と共に中原徳太郎校長を援け寝食を忘れて再建に努力した．危機から立ち直る為には強力な教育方針の確立と学内の団結を固める事が急務であった．中原校長は小此木らとはかり校是を「克己殉公（コッキジュンコウ）」と定めたが，これはフーフェランドの内科書の医戒から「己を捨てて他の為に生くること固（モト）より医道の本質なり」を引用したものである．小此木の真骨頂は古武士的と称された心意気にあり，黙々として苦難続きの学校経営にあたった．昭和2年11月17日初代中原学長の急死で大学関係者は学長就任を小此木に求めてきた．晩節を飾る好個の贈物かとも思われたが，昭和2年11月24日就任したものの翌3年1月6日志半ばにして他界した．就任以来僅か1ヶ月余の事である．学生に説いた「克己殉公」と「医戒」をまさに自現した壮絶な死だった．小此木には独特の機智頓才があり人柄，博識と相俟（マ）って多彩な交遊もありその見識を高く評価する人もいた．一方無名の学生土屋文明の生活の援助をしてもいた．土屋は東大卒後大正14年4月から昭和11年迄日本医大の予科講師として，修身，心理学を講義していたが「医戒」を独語から訳したものを学生に読ませていた．当時土屋を慕った学生の一人である荻野新六（日医大昭9卒）は後年「フーフェランドの医戒を今も守っている．」と言って土屋を感動させている．

（4）おわりに

日本医科大学第二代学長小此木信六郎は，学長の在任期間こそ短いが明治29年済生学舎講師として着任以来，学校発展の為に生涯を捧げた．大学の基盤はまさに中原校長，小此木理事長時代に作られたといっても過言ではない．国手たる者の心得るべきは根底に医道更に医学，医術であると学生達に説いた．「資性温厚にして謙譲，名利の念に淡（ウス）く常に功績を他に遜（ユズ）るの風あり．」と讃えられている．土屋文明も又貧窮時代に旧師から受けた恩を忘れてはいなかった．命ぜられた「医戒」の翻訳は小此木の在世中に完成しなかったが，「命ぜられしフーフェランドの翻訳は年渡れるに果さざりけり」とその死を悼んでいる．